

Title	バルトロメー・デ・ラス・カサス 生涯と作品(4) : セプールベタとの出会い
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	大阪外国語大学学報. 40 p.103-p.118
Issue Date	1978-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80688
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

バルトロメー・デ・ラス・カサス

生涯と作品 (4)

——セプールベタとの出会い——

染 田 秀 藤

Bartolomé de Las Casas vida y obras (4)*

——Encuentro con Sepúlveda——

Hidefuji SOMEDA

Volviendo a España en 1547, Las Casas se esforzó por adquirir unas cédulas reales que favorecieran la evangelización pacífica en la Tierra de Vera Paz y en la Florida, y que protegieran la libertad y el derecho de los indios, con mucho éxito. Pero, al mismo tiempo, Las Casas se vio obligado a defenderse de la acusación de los conquistadores y pobladores de las Indias y también del ataque de sus partidarios en la Corte. Entre éstos estaba el primer gran humanista aristotélico de España—usando la expresión de Aubrey F.G. Bell—, Juan Ginés de Sepúlveda. Y en este artículo, más bien que estudiar el conflicto político e ideológico entre Las Casas y Sepúlveda, que habría de culminar en el famoso gran debate de Valladolid en 1550-1551, intento aclarar el pensamiento sepulvedaiano acerca de la conquista de las Indias, a través del análisis de su obra *Democrates Secundus*, escrita en 1545.* *

*Este artículo es la continuación de otros mis anteriores, cuyo título es igual que éste, “Bartolomé de Las Casas, vida y obras”, que han salido en los números 9,10 y 11 de la revista anual de la Universidad de Eichi (Universidad Católica de Osaka), llamada *Sapientia*, 1975-1977.

* *EI autor quiere agradecer al Dr. Lewis Hanke y al Dr. Angel Losada la ayuda prestada para escribir este artículo.

11

1547年5月、ラス・カサスはリスボン、サラマンカを経由してバリャドリッドに入った。⁽¹⁾当時、皇帝カルロス五世はドイツ新教徒諸侯との戦いに忙殺され、イスパニアを不在にしていたので、摂政として王子フェリーペがイスパニアを統治していた。ラス・カサスは対インディアス政策の改善に積極的で、しかも彼の考えに好意的な態度を示すフェリーペに謁見するため、アランダ・デ・ドゥ⁽²⁾

エロへ向った。のち、彼はアラゴン王国の議会^{コルテス}に出席するフェリーペに随行してモンソンへ赴いた。⁽³⁾その頃、ラス・カサスの関心事のひとつはチャパ司教区のインディオの保護に必要な勅令を得ることであった。そこで、彼はカシーケの従来の権利を認めることと伝道師がエンコメンデーロの妨害を受けずにインディオの改宗化に従事できるようにすることの必要性をフェリーペに強く訴えた。⁽⁴⁾その結果、同年7月22日、フェリーペはベラ・パスの平和的改宗化の企てを支持すると同時に、改宗したカシーケ、ペドロ・ノティ（のち、アセベードと改名）らにそれまでの協力に感謝するとともに向後の助力を要請する書簡を送り、⁽⁵⁾又、10月11日には改宗化に従事していたドミニコ会士ペドロ・デ・アングロらに書簡を送り、彼らの努力を高く評価し、一層の精進を求めた。さらに、同日、フェリーペはヌエバ・エスパーニャの各アウディエンシアに対して勅令を出し、ベラ・パスにおけるドミニコ会士の活動を支援するよう命じた。⁽⁶⁾同月30日には、フェリーペはユカタンの総督モンテホに勅令を發布して、スペイン人がベラ・パス地方へ入るのを禁止し、又、アウディエンシア・デ・ロス・コンフィネスに対しては平和的改宗化に従事しているドミニコ会士らを迫害しないよう命じた。⁽⁷⁾

すでに言及したように、⁽⁸⁾帰国以前、ラス・カサスは「新法」の実施〜とりわけ、インディオ奴隷の解放〜をめぐりチャパ司教区のイスパニア人植民者やアウディエンシア・デ・ロス・コンフィネス（総裁アロンソ・デ・マルドナード）と激しく対立していた。そのため、帰国後、ラス・カサスはマルドナードに対するレシデンシアの実施を強く求めた。一方、こうしたラス・カサスの動きを察知したマルドナードは1547年9月20日に国王へ書簡を送り、ラス・カサスの非難を故なきものだ⁽⁹⁾と訴えた。しかし、ラス・カサスの訴えが受理され、翌年4月19日、マルドナードに代⁽¹⁰⁾って、ラス・カサスの推選を受けたロペス・セラートがアウディエンシアの総裁に就任した。⁽¹¹⁾そして、インディオ奴隷の解放と、司教の権威に対する恭順を求め、さらに利益の多い事業や遠征への司法役人の参加を禁止する訓令がセラートに与えられたが、明らかに、それはラス・カサスの要望を採り入れたものであった。さらに、ユカタンをメキシコのアウディエンシアの管轄下に置き、モンテホから彼の所有するインディオ奴隷を剥奪し、さらにタバスコを王室の直轄領とすることが決定された。⁽¹¹⁾

同じ頃、ベラ・パスの平和的改宗化の成功に自信を得たラス・カサスはルイス・カンセルが抱いたフロリダにおける平和的改宗化計画に賛同し、その実行の許可を得るために奔走した。⁽¹²⁾1547年12月29日、フェリーペはアルカラー・デ・エナレスにおいて計画の実行を承認し、ヌエバ・エスパーニャの副王安トニオ・デ・メンドーサとグワテマラのアウディエンシアの総裁セラートに対しフロリダへの遠征を援助するよう命じた。⁽¹³⁾こうして公式な許可を得たカンセルはセビーリャで出帆準備に取りかかったが、仲々進捗しなかった。1548年2月6日にカンセルがラス・カサスに出した書簡⁽¹⁴⁾によれば、船長やその他の人々が兵士を伴わずに伝道師だけでインディオの土地へ赴くことに極めて不安を感じていたことが判る。又、同年2月24日、⁽¹⁵⁾3月9日⁽¹⁶⁾にも、カンセルはラス・カサスに遠征に対する様々な障害を訴え、助力を求めた。とりわけ、3月9日付の書簡はカンセルがラス・

カサスに宛た最後のもので、セビーリャの人々が平和的改宗化の企てに抱いていた驚きと不安な気持ちを如実に伝えている。⁽¹⁷⁾ こうしたカサスの要請を受けて、ラス・カサスは物質的な援助を取りつけるのに努力したが、カサスと共にフロリダへ遠征する伝道師を集めることはできなかった。カサス自身も、企てにはインディアスの実情を知った熟練の伝道師が必要だと考え、結局、1549年、メキシコへ戻った。⁽¹⁸⁾ 同年中頃、カサスは四人の高潔な伝道師、グレゴリオ・デ・ベテータ、フワン・ガルシア、ディエゴ・デ・トロサとフェンテスと共にサン・フワン・デ・ウルアを出帆し、フロリダへ向った。⁽¹⁹⁾ しかし、その後、フロリダに住むインディオの平和的改宗化は悲惨な結果に終り、カサスは殉教することになった。⁽²⁰⁾

同じく、ラス・カサスはインディアスにおける布教活動の充実と促進のため、伝道師の募集と派遣に大きな努力を払った。とくに、彼はメキシコとチャパに正廉潔白なドミニコ会士を派遣しようと考えた。しかし、修道会の長上はラス・カサスが求める数の伝道師の派遣には消極的であった。そこで、ラス・カサスは、当時伝道師の派遣に関しては直接的な権力を有してはいなかったとはい⁽²¹⁾うものの、インディアス関係の最高機関で、絶大な権力をもつインディアス枢機会議に事情を報告し、事態の解決を求めた。その結果、1548年5月1日、カステーリャのドミニコ会管区長に対し、伝道師の派遣を要請する勅令が⁽²²⁾発布された。1550年9月11日には、当時イスパニアの統治に当たっていたオーストリア大公マクシミリアンとその妃マリーア（フェリーペの実妹）が25名のドミニコ会士のインディアスへの渡航費を支払うよう通商院に命じた。⁽²³⁾

こうして、帰国後のラス・カサスは王室の新しい支持を得て、とりわけベラ・パスの伝道活動に有利な勅令やマルドナード、モンテーホらを罷免する勅令を数多く獲得した。又、本国にいるラス・カサスに宛て、インディアスから数々の請願書が送り届けられた。⁽²⁴⁾ それは宮廷におけるラス・カサスの権力の大きさを示すものであった。つまり、逆説的ではあるが、1545年10月20日の国王による「新法」の撤回はラス・カサスと国王との関係を一層強めることになったのである。それは、フリーデの主張するように、⁽²⁵⁾ アメリカにおいてエンコメンデーロという上流の社会階級の勢力拡大を抑制する必要のあった国王の政治的立場と反エンコミエンダ制を唱えるラス・カサスの人道的立場との利害の一致とみることができよう。とは言え、フリーデのように余りにも国王の政治的立場を強調しすぎると、インディアス論争そのものの、ひいては当時のスペインの思潮を見失ってしまう危険がある。⁽²⁶⁾ カルロス五世の最も顕著な特徴は強烈な倫理感にあるというフェルナンデス・アルバレスの意見を軽視することはできないであろう。⁽²⁷⁾

12

一方、インディアスにおいては、「新法」の撤回にも拘わらず、反ラス・カサス運動は依然として激しく展開されていた。別の機会に言及したように、⁽²⁸⁾ 1545年10月20日、カルロス五世はメヘレンにおいて「新法」の数か条を撤回もしくは修正した。しかし、撤回、修正された条項はエンコミエンダの漸次廃止を打ち出した第30条とエンコミエンダに関する訴訟は国王が直接に管轄することを定め

た第33条であって、インディオの奴隷化を全面的に禁止した第21条などは撤回されなかった。⁽²⁹⁾ 頻発するインディオの反乱の鎮圧や、とくに新しい金銀鉱山の発見に伴う労働力の確保の必要に迫られたイスパニア人にとって、インディオを奴隷化したり、荷担ぎ人夫として使役したりするのを禁止した法は大きな障害となった。⁽³⁰⁾ そのうえ、ラス・カサスが著した『告解規範』はインディオ奴隷所有者に対し、告解の秘蹟を授けるのを禁止していた。⁽³¹⁾ 従って、植民者たちは経済的にも精神的にも窮地に追いやられ、その結果、「新法」制定の張本人（彼らの意見によれば）で『告解規範』の著者であるラス・カサスに激しい憎悪の念を抱いた。とりわけ、チャパ司教区のイスパニア人は同地でラス・カサスの教えを守って布教活動に従事していたドミニコ会士と激しく対立した。例えば、1548年6月頃、シウダー・レアルの住民アロンソ・トレビーニョはドミニコ会士迫害の実情調査に來たデイエゴ・ラミレスに、告白拒否と賠償義務を定めたラス・カサスを訴えた。⁽³²⁾ 又、同年12月7日、シウダー・レアルの市議会は同市の代表として、ヒル・キンターナとバルタサル・ゲッラに全権を委ね、宮廷で反ラス・カサス運動を行なうよう要請した。⁽³³⁾ この頃、ラス・カサスは請願書をインディアス枢機会議に提出し、宮廷におけるグワテマラの代表の行為を非難した。それによれば、代表たちはアウディエンシアの総裁セラートが行なったインディオ奴隷の解放を無効にするよう画索したらしい。⁽³⁴⁾ 請願書では、ラス・カサスは代表たちの態度を激昂した調子で弾劾しているが、おそらく、そのグワテマラの代表というのが、かつてラス・カサスと一時的にせよ親しい間柄にあったシウダー・レアルのキンターナとゲッラであったからであろう。⁽³⁵⁾

このようにして、帰国後のラス・カサスは王室の支持を得る一方で、インディアスからの非難や宮廷にいる反対派の攻撃に対し、防御する立場にたたされた。そして、その反対派の中に、それまでラス・カサスが相手にしたことのない学識豊かな人物がいた。フワン・ヒネース・デ・セプールベダである。⁽³⁶⁾

1542年、セプールベダは皇帝カルロス五世の勅命を受け、オノラト・フワンと共に王子フェリーペの教育、とくに、ラテン語教育を任され、同年、宮廷の所在地モンソンとバルセローナに滞在した。⁽³⁷⁾ 同じ頃、宮廷では、「新法」の制定をめぐる激しい論議が交わされていた。従って、セプールベダはその頃、インディアス問題の重要性を身近かに知ったに違いない。とくに異教徒オスマン・トルコとの戦いを奨励する論文 *Ad Carolum V imperatorem invictissimum, ut facta cum omnibus christianis pace, bellum suscipiat in turcas* ⁽³⁸⁾ を著したセプールベダにとり、インディアスの征服の正当性をめぐる論争は大きな関心事であった。1545年には、「新法」の撤回と修正を求める書簡がインディアス各地から宮廷に届いていたし、とくに、同じ目的で本国へ帰ったヌエバ・エスパーニャのフランシスコ会管区長フランシスコ・デ・ソト、ドミニコ会管区長ドミンゴ・デ・ラ・クルース、アウグスティヌス会管区長フワン・デ・サン・ロマーンらが宮廷において「新法」が現地で惹起している不穏な状況を訴えていた。⁽³⁹⁾ おそらく、その頃セプールベダは公に自己の考え～インディアスの征服は正当である～を述べたのであろう。その結果、かつて「新法」制定の際にエンコミエンダ制の撤廃に激しく反対したインディアス枢機会議の議長ガルシア・デ・ロアイサの

要請を受け、セプールベダは自己の考えを文書にして提出することになった。それが有名な『第二のデモクラテス・インディオに対する戦争の正当原因についての対話』*Democrates secundus, sive dialogus de justis belli causis apud Indos*(以後、『第二のデモクラテス』と略す)である。⁽⁴⁰⁾ 1545年9月27日付のフワン・デ・スニガの国王宛の書簡から判断すれば、『第二のデモクラテス』はそれ以前にバリャドリッドにおいて執筆されたと考えられる。セプールベダはその作品の出版を企図したために、その後1550年に至るまで、たえず苦悩を味うことになるが、その経過を辿る前に、『第二のデモクラテス』に見られるセプールベダの考えを簡単に検討してみよう。⁽⁴²⁾

13

セプールベダはモンデハル侯ルイス・デ・メンドーサに献げた序文で、著述の動機を次のように説明している。

「(インディオに対する戦争の正当性をめぐり)非常に博学かつ思慮分別のある人々の間で、意見が大きく分れています。そして、私はこの件について充分熟慮した末、論争に終止符を打つことができるとされる意見を持つに到りました。私は、大勢の人が関わっている公のこの問題を座視したり、多くの人々が夫々、所信を述べている時に黙しつづけたりしてはならないと考えました。とりわけ、要職についておられる権威ある人々が私に私の考えを文書にして明らかにするよう要請されましたので、尚更のことでした。その人々は、私が以前手短かに開陳した考えに同調されていたようです」⁽⁴³⁾

作品は二部から成り、『第一のデモクラテス』と同様、対話形式で書かれ、登場人物はドイツ人でルター派と思いきレオポルドとデモクラテスの二人で、セプールベダはデモクラテスの口を通して自己の考えを披瀝する。内容的には、(1) 一般に戦争が正当となるのに必要とされる諸条件と、(2) インディアスの征服を正当化する具体的な理由の論述とに大別される。(1)に関しては、セプールベダはすでに『第一のデモクラテス』で開陳した理論を敷衍しているだけである。不正を排除するために行なわれる戦争はキリスト教徒に許容されるとするセプールベダは、何らの不正を加えていないインディアスの人々に対する戦争が正義とキリスト教の慈愛と一致するののかどうかというレオポルドの質問に答える時、自然法についての解釈を明らかにする。彼はケケロの理論を踏襲して、自然法とは理性を賦与された被造物への「永久法」*lex aeterna*の参加だと言い、「永久法」とは、聖アウグスチヌスに従い、自然的秩序の維持を希求する神の意志だと述べる。⁽⁴⁴⁾つまり、セプールベダは人間の意識における自然的秩序の刻印を自然法と解している。しかし、人間は「永久法」の直接的な洞察を妨げられているので、自然法からその内容を推理することができるだけである。しかし、自然法においてもその諸規範を完全に見出せるわけではない。そこで、セプールベダは、トマス・アキナスにならい、人は人間の目的志向的本性が理性によって管理された人間の自然的傾向によって示すような善きものから、理性を頼りとする固有の努力によってそれらの規範を推理しなければならないとする。そうして、彼は『ローマ人への手紙』第2章第14句を引用して、正しい理性が自然法である

と主張する。⁽⁴⁵⁾すでに『第一のデモクラテス』で、セプールベダは自然法の内容を決定～自然法の根本規範の間接的推断～するのは“正しい、徳高い人々”であると述べていた。⁽⁴⁶⁾このようにして、彼は“理性としての自然法”⁽⁴⁷⁾を主張して理論を展開していく。すなわち、セプールベダにあっては、自然法と人定法とが同一視され、無差別に用いられる。これはセプールベダ理論の顕著な特徴であり、自然法をすべての人間、民族に共通するものとして捉えるピトリアラサランカ学派らの立場とは異なるものである。正義とキリスト教の慈愛に一致した戦争の諸原因に関して、セプールベダは、戦争が正当となるためには正当な原因だけではなく、正当な権威、戦争を遂行する人の正しい意図と戦争の正しい遂行とが必要であると答える。つづいて、聖イシドーロに従って、正当戦争の原因を三つ列挙する。① 正当防衛の範囲内で、現存する不正を排除する。② 不正に奪われたものを奪還する。③ 攻撃を加えた人々に罰を下す。さらに、セプールベダは、それ以外にも自然法及び神の法によって正当とされる戦争原因がいくつかあり、そのうちのひとつは、インディオに適用されているもので、アリストテレスの先天的奴隸人説に基づくものだと言う。⁽⁴⁸⁾完全なものが不完全なものを支配し、完全なものへ近づけると考えるセプールベダはアリストテレスの理論を自然法と合致させ、さらに神の法で立証しようとする。戦争は正当な権威、すなわち、君主又は至高の権威者、もしくはその代理人を通じてのみ行なうとし、戦争行為自体は目的に則して価値づけられ、戦争の目的は復讐にあるのではなく、人々が平和に、正義に基づいて生活を送れるようにすることと、公益 *bono publico* を守ることであると主張する。⁽⁵¹⁾

このような自然法理論と正当戦争理論を基礎にして、セプールベダはインディオに対する征服戦争の正当性を論証する。この時、彼は4つの理由を挙げているので、ここではその論証を順に追っていくことにする。

[1]アリストテレスの先天的奴隸人説に基づく——法学者のいう奴隸と異なり、哲学者のいう奴隸とは悟性に欠け、非人間的な野蛮な風習に染まっている者だとし、支配は自然法に基づくという立場から、次のように述べる。「肉体的には頑健ではないが分別や才能の面で優れている人々は生来の主人であり、一方、必要な義務を全うするだけの肉体的な頑健さに恵まれていても悟性に欠ける人々は生来の奴隸である。後者にとり、このことは正しいばかりか、生来の主人に仕えるのは有益なことである」。⁽⁵²⁾換言すれば、先天的奴隸人がより人道的で徳高い国や君主に服することは、彼ら自身にとって有益であり、それは自然法にも一致している。服従することにより、彼らは徳と分別を見習い、法を遵守し、より温和な行動をとるようになる。従って、もし彼らが文化的に優れた人々（イスパニア人）の支配を拒否するなら、自然法に基づいて正当に彼らに戦争を仕掛けることができると言う。ここで注意しなければならないのは、セプールベダが先天的奴隸人説を個人ではなく、人種、集団、国家に適用している点と戦争の条件としてインディオの抵抗を明示している点である。さらに、文化的能力に関しても、セプールベダが先天的奴隸人の発展可能性を否定していないことに注目しなければならない。⁽⁵³⁾アリストテレスは「自然によってある人々は自由人であり、ある人々は奴隸であるということ、そして、後者にとっては奴隸であることが有益なことであり、正

しいことでもあるということは明らかである⁶⁴」という。すなわち、アリストテレスによれば、この主従関係の有用さはむしろ主人の側にあり、主人は奴隷の地位の向上等には全く関心を抱かない。しかし、セプールベダは、そうした奴隷制を主張しているのではない。セプールベダの理論は“分別ある人々による蛮人の保護”を主張したものだというシルビオ・サバーラの指摘⁶⁵は正鵠を得ていると言えよう。又、セプールベダは、のちの人種主義者のように、文化的能力に関して、ある特定の人種の恒久不変的な優越性を主張しているわけではない。

〔2〕インディオの犯している偶像崇拜や人身犠牲、その他、自然に反する罪に基づく——『申命記』、『レビ記』、『出エジプト記』等の聖句を引用して、キリスト教徒、異教徒を問わず、偶像崇拜や人身犠牲を行なうのは神及び人間の本性に反する罪を犯すに等しく、死罪に値すると言ひ、彼らの生命や財産を奪うことは正当だと結論する⁶⁶。この個所で、セプールベダはただ異教徒であるという理由だけで行なわれる戦争は正当化されないと主張する⁶⁷。しかし、そのあとで、彼は異教徒の中に十戎や隣人愛に集約される自然の掟を守らない者がいた時には、キリスト教君主はローマ教皇の權威に基づいて、彼らを処罰し、矯正するための戦争を行なえると言う。さらに、教会は必要と思われる掟を異教徒に命じ、それを実行させるのに必要とあらば力を行使できると述べる⁶⁸。ここでのセプールベダの理論は矛盾している。すなわち、彼は神の法に則して異教徒ゆえの戦争を否定しながら、他方では教会が異教徒に対して強制的な管轄権を事実上有し、行使しようと主張しているのである。ベナンシオ・D・カロが指摘しているように⁶⁹、セプールベダは異教徒を、パスやカエターノやラス・カサスがしたようには、区別していない。従って、ラモン・エルナンデスが結論を下しているように⁶⁹、セプールベダにとっては、偶像崇拜の罪だけでも、又、人身犠牲の罪だけでも、異教徒に対する戦争の正当原因となりえたのだと言えよう。結論的に、セプールベダは極めて曖昧な次のような主張をする。「異教徒は異教を奉じているということだけで、意志に反して信仰を奉じよう、強制されたり、処罰されたりすることはありえない。しかし、キリスト教徒は異教徒を、彼らの犯している罪から解放することはできる」⁶⁹。

〔3〕大勢の無実の人々を人身犠牲などの不正な死から救うことに基づく——ヌエバ・エスパーニャの人身犠牲を例にして論証するこの第三番目の理由は、上で述べた第二番目の理由と混同してはならない。なぜなら、第二番目の理由は神及び人間の普遍的な本性に反する行為について述べたものであり、第三番目の理由は人間に対する行為を問題としているからである。セプールベダは聖句を引用して、隣人を不正から守るのはすべての人間に課せられた義務であると説き、その義務を全うしないのは不正を加えるのに等しい行為だと主張する⁶⁹。故に、人身犠牲などの不正な死からインディオを守るために行なわれる征服は正当であるばかりか、キリスト教徒の義務だと結論する。明らかに、これはビトリアが「同盟者であり友人であることに基づく権原」としてインディオに対する戦争を正当化した理由である⁶⁹。

〔4〕キリスト教を弘めることに基づく——破滅へ向う人々（異教徒）を正し、仮令その意志に反してでも、彼らを救霊の道、すなわち、キリストの信仰へ導くのは自然法及び神の法に一致する⁶⁹。

つまり、布教はキリスト教徒の義務である。その義務を遂行するには、かつてキリストや使徒が用いた説諭による方法と、説教を妨げるような障害物を排除するために武力を行使して行なう説諭による方法とがある。こう主張して、セプールベダは、目的は手段を正当化するという立場になって、イスパニア人による布教は異教徒を前もって服従させることによってしか実現しえないと論じる。⁽⁶⁷⁾キリスト教史の大論争のひとつとなった『ルカによる聖福音書』第14章第16～24句の比喻の解釈に⁽⁶⁸⁾ついて、セプールベダは最初の招待はコンスタンチヌス大帝以前の方法であり、第三番目の招待はコンスタンチヌス大帝以後のキリスト教会の採用した方法だと主張し、異端であろうと異教徒であろうと、福音の宴には参加しなければならないと述べる。セプールベダはローマ教皇の権威に言及し、次のように断言する。「キリストが自らの代理人及びその後継者に伝え、委ねた権威は、まさしく救霊と霊的生活に属する事柄に關してのものであるが、しかし、霊的な事柄に秩序づけられる限りにおいて、その権威は俗的な事柄から排除されていない。」⁽⁷⁰⁾明らかに、セプールベダは異教徒に対するローマ教皇の直接的な世俗権を否定している。従って、彼にあっては、インディオを服従させるという俗的な事柄は彼らを救霊の道へ導くという霊的⁽⁷¹⁾目的へ秩序づけられてはじめて正当化されるのである。そこで、セプールベダは、ローマ教皇アレクサンデル六世の大教書はイスパニアの国王に予めインディオを服従させ、しかるのちに福音を宣べ伝えるよう勧めたものだ⁽⁷²⁾と主張するのである。そして、聖アウグスチヌス、コンスタンチヌス、トマス・アキナス、聖グレゴリウス等を引用して、武力をもって説教を行なう方法の正当さを立証する。⁽⁷³⁾

以上4つの理由から、セプールベダはイスパニアによるインディアス征服を正当化するが、しかし、彼はコンキスタドルたちの不法な行為を正当化しているわけではない。作品の中で彼自身が明言しているように、問題は征服戦争の性格及び征服戦争とイスパニア国王との関係なのである。⁽⁷⁴⁾

こうして正当化された戦争の遂行方法について、セプールベダは、インディオにはキリスト教徒が授ける大いなる恵みを受け入れ、最良の法と慣習の教育を受け、真の信仰を奉じ、かつ、イスパニア国王の支配を認めるよう勧告すべきで、その勧告を審議するのに必要な時間をも与えるべきだと言う。⁽⁷⁵⁾もし彼らが勧告を受け入れれば、彼らを奴隷化したり、彼らの財産を奪うのは不当である。しかし、彼らが抵抗した場合は、正当戦争が行なわれ、その結果、敗北者に対しては、君主は公共の善に鑑みて適当と思えることを決定できる（奴隷化、財産の没収等）。⁽⁷⁶⁾セプールベダは自発的にイスパニア王の支配に従ったインディオに対し、イスパニア人と同等の権利を与えることを認めない。⁽⁷⁸⁾すなわち、彼はインディオとイスパニア人との間に完全な平等を認めず、自発的に臣従するインディオには“封建的支配” imperium herile⁽⁷⁹⁾が適切だと言う。なぜなら、彼らは先天的奴隷人であり、支配されないと、その墮落した風習、その他の原因で自己の義務を全うできないからである。この考えは必然的にエンコミエンダ制を是認する方向へ向う。⁽⁸⁰⁾とは言え、セプールベダは絶対的かつ不変的な意味で両者の平等を否定しているわけではない。マルコスが言うように、セプールベダ⁽⁸¹⁾が作品を執筆した時代は植民化が開始されたばかりであった。従って、セプールベダの理論を一概に帝国主義的と決めつけるのは正しくない。

こうした考えがラス・カサスの思想と対立するのは明白であった。ハンケは、セプールベダを弁護する学者は「セプールベダがその論文の主要部で、インディオは例外なくアリストテレスの理論に従って先天的奴隷人であり、彼らの劣等者としての本性は彼らに対する戦争を正当化し、その戦争の生存者はすべて奴隷化とうと主張している」事実を忘れてしていると非難している。⁽⁸²⁾ハンケのこの非難は誤りではないが、しかし余り強調されてはならない。なぜなら、セプールベダはアリストテレスの説をインディオに適用することによって、経済的搾取を目的としたインディオ支配を肯定しているのではないし、彼もまた、ラス・カサスらと同じく、インディオの改宗化とインディアスにおけるキリスト教の確立を目ざしていたからである。モレーノ・ケラルトーの指摘しているように、問題は、セプールベダがその目的の達成のために主張した手段が、ラス・カサスやサラマンカの神学者が首肯しえない理論に基づいていた点にあった。セプールベダはアリストテレス理論を中心に聖書やキリスト教の教義を解釈したとは言えないであろうか。

14

その後、セプールベダは作品をインディアス枢機会議に提出し、印刷出版の許可を求めた。しかし、“発行されると大きな混乱と幣害が生じることを熟知していた”インディアス枢機会議はセプールベダの要請を却下した。そこで、セプールベダは宮廷にいる友人たちに働きかけカスティーリャ枢機会議に作品を検討させることに成功した。⁽⁸⁴⁾同枢機会議において、ゲバーラ、ディエゴ・デ・ビトリア（フランシスコ・デ・ビトリアの弟）、モスコソ、フランシスコ・モンタルボらは作品の出版に賛同した。そうして出版許可が降下されようとした時、インディアス枢機会議員数名がカスティーリャ枢機会議の判断に反対を表明した。⁽⁸⁵⁾1545年9月27日、フワン・デ・スニガは国王にこの経緯を説明し、『第二のデモクラテス』のカスティーリャ語による要約を送付した。一方、セプールベダもカルロス五世に事情を説明し、善処を求めた。それに対し、国王はカスティーリャ枢機会議に、作品の内容を検討し、支障がなければ出版を許可するよう命じた。⁽⁸⁷⁾ラス・カサスがインディアスより戻ったのは恰度その頃で、彼はこの時はじめて事態の重大さに気付き、激しい抗議の声を上げた。“インディアスの事柄に全く通じていない”カスティーリャ枢機会議は、とくに問題が神学に関わるところが多かったので、作品の審査をアルカラーとサラマンカの両大学に依頼した。⁽⁸⁸⁾1547年秋、サラマンカ大学で会議が開かれ、神学者メルチョール・カノや法学者ディエゴ・デ・コバルビアスらが参加した。⁽⁸⁹⁾翌年3月から5月、セプールベダはアルカラー大学で、又、そののち、サラマンカ大学で多くの神学者らと意見を交わし、作品出版の認可を求めた。⁽⁹¹⁾しかし、両大学とも同年中頃、作品の印刷出版は好ましくないと決定した。両大学ともその決定の理由を明示せず、作品で開陳されている理論が“不確実”であるからと述べているだけである。⁽⁹²⁾“不確実”というからには、おそらくインディオが本性、他者に従属すべきであるとした先天的奴隷人説が神学者らに否認されたのであろう。

こうして作品は出版が禁止されたにも拘わらず、手稿のまま流布し、各地で論争を惹起した。⁽⁹³⁾セプ

ールベダは両大学の決定にはラス・カサスの影響が強いと判断し、出版許可を求める運動をつづける一方、ラス・カサスに対し攻撃を加えた。とくにその攻撃はラス・カサスが著した『告解規範』に向けられた。

『告解規範』に対するインディアスからの非難は次第に高まり、インディアス枢機会議は1548年11月28日にヌエバ・エスパーニャ及びイスパニア本国で流布している同論文の写しの撤収を命じるとともに、ラス・カサスに弁明を求めた。⁽⁹⁵⁾ とくに、その非難は、「これまでインディアス全域で行なわれたことは例外なく…自然法と人定法、さらに神の法にも反する。従って、それらはすべて不正で邪悪で暴虐的であり…何ら法的な価値を有さない」という第7の規則⁽⁹⁶⁾に向けられ、それはインディアスに対するイスパニア国王の権利を否定するものだといって告発された。撤収命令はラス・カサス理論を正統でないと判断したうえで出されたのではなく、又、作品の出版を禁止する目的で出されたのでもない。むしろ、マヌエル・マルティネスが指摘しているように、そうした非難を鎮めるために採られた措置と考えるべきであろう。そこで、ラス・カサスはインディアス枢機会議の要請⁽⁹⁷⁾どおり、その非難に答える論文を作成した。それが『30の法的命題集』*Treinta proposiciones muy juridicas* ...である。⁽⁹⁸⁾ (つづく)

〔註〕

- (1) Antonio de Remesal, O.P., *Historia general de las Indias Occidentales y particular de la Gobernación de Chiapa y Guatemala*. B.A.E. CLXXXIX. Madrid. 1966. Lib. VII. Cap. XXVI. § 2. p. 183b.
- (2) 1546年 6月26日、同年11月29日、翌年1月15日に、フェリーベは合計10の勅令等を発布し、ラス・カサスらドミニコ会士による平和的改宗化の企てを支援した。1月15日付の勅令によって、トゥスルトランが正式にベラ・パス（真の平和）と改称された。（Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *Bartolomé de Las Casas 1474-1566. Bibliografía crítica y cuerpo de materiales*. Santiago de Chile. 1954. Docs. 258-265. pp. 101-103. Antonio María Fabié, *Vida y escritos de don Fray Bartolomé de Las Casas, obispo de Chiapa*. Madrid. 1879. II. Apéndice XIII. pp. 139-143)
- (3) Remesal, *op. cit.*, Lib. VII. Cap. XI. § 1. p. 130b.
- (4) この頃、ラス・カサスは仇敵フランシスコ・デ・ロス・コボスの死（1547年 5月10日）を知り、宮廷における交渉に一層の自信を強めたい（Manuel Giménez Fernández, “Fray Bartolomé de Las Casas A Biographical Sketch” Juan Friede, Benjamin Keen et. al., *Bartolomé de Las Casas in History. Toward an Understanding of the Man and His Work*. Dekalb. 1971. 所収 pp. 67-125. 106.）
- (5) Remesal, *op. cit.*, Lib. VII. Cap. XI. § 2. p. 131a-b.
- (6) Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *op. cit.*, Docs. 266-270, 274, 275. レメサルによれば、植民者によるドミニコ会士迫害の実情を調査するため、ディエゴ・ラミレスが派遣されたが、この人選にもラス・カサスは大きな影響を与えた（Remesal, *op. cit.*, Lib. VII. Cap. XI. § 6. pp. 132a-b.）

- (7) Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *op. cit.*, Docs. 276—277. p. 106.
- (8) 拙稿「バルトロメー・デ・ラス・カサス ～生涯と作品～(3)」英知大学論叢「サビエンチア」第11号。昭和52年2月。pp. 125—145. 130—133.
- (9) Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XIV. pp. 146—147.
- (10) Ernesto Schäfer, *El Consejo Real y Supremo de las Indias*. Sevilla. 1947. II. p. 472. セラートは聖職者以外でラス・カサスの賞讃を得た数少ない人物。しかし、総裁としてグワテマラへ赴任したのち、権威を乱用して親族縁者にインディオを分配したため、ラス・カサスはセラートを訴えることになる(参照: Marcel Bataillon, “Las Casas et le Licencié Cerrato” *Etudes sur Bartolomé de Las Casas*. Paris. 1965. 所収 pp. 239—247.)
- (11) Henry Raup Wagner, *The Life and Writings of Bartolomé de Las Casas*. Albuquerque. 1967. p. 170 モンテホ家とセラートらアウディエンシア側との対立については、Robert S. Chamberlain, *Conquista y Colonización de Yucatán 1517-1550*. México. 1974. pp. 299—314を参照。
- (12) Agustín Dávila Padilla, O.P., *Historia de la fundación y discurso de la provincia de Santiago de México de la Orden de Predicadores*. México. 1955. Lib. I. Cap. LV pp. 182—183.
- (13) Remesal, *op. cit.*, Lib. VIII. cap. XXVI. § 5. p. 185a-b.
- (14) Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XX. pp. 169—174.
- (15) *Ibid.*, pp. 174—178.
- (16) Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *op. cit.*, Doc. 285. pp. 108—109.
- (17) *Loc. cit.*, “Está toda Sevilla admirada desta obra, á unos les parece bien, y son los que más sienten de Dios, y á otros les parece que vamos al matadero.”
- (18) Remesal, *op. cit.*, Lib. VIII. Cap. XXVI. § 6. pp. 185b—186a.
- (19) *Ibid.*, Cap. XXVII. § 1. p. 186a-b.
- (20) Dávila Padilla, *op. cit.*, Lib. I. Cap. LVI. pp. 184a—186a.
- (21) Pedro Borges, “El Consejo de las Indias y el paso de misioneros a América durante el siglo XVI” *El Consejo de las Indias en el siglo XVI*. Valladolid. 1970. 所収 pp. 181—189. 184.
- (22) Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *op. cit.*, Doc. 287. p. 109.
- (23) *Ibid.*, Doc. 318. p. 118. 1550年6月12日にも、サラマンカのサン・エステバンのドミニコ会修道院長に対して、伝道師の募集と派遣に関しラス・カサスを援助するよう命じる勅令が出された: “...prestase al padre fray Vicente de Las Casas, que iba de parte del obispo de Chiapa a reclutar operarios evangélicos, todo favor y ayuda..., y juntamente con él por vuestra parte procuréis con la instancia necesaria que de ese convento se ofrezcan algunos buenos religiosos que pasen a aquellas partes e a entender en la predicación y conversión de aquellos infieles...” (Cit. por Vicente Beltrán Heredia, O.P., “El maestro Domingo de Soto en la controversia de Las Casas con Sepúlveda” *Ciencia Tomista* Año XXIV. Núm. CXXXIII. enero-febrero. Salamanca. 1932. pp. 35—49. 48.)
- (24) Lewis Hanke y Manuel Giménez Fernández, *op. cit.*, Docs. 281, 288, 291. p. 107. pp. 109—110. Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XX. pp. 180—181.

- (25) Juan Friede, *Bartolomé de Las Casas. Precursor del anticolonialismo. su lucha y su derrota*. México. 1974. p.173.
- (26) この点については、Lewis Hanke, *The Spanish Struggle for Justice in the Conquest of America*. Philadelphia. 1949. pp.5—8を参照。
- (27) Manuel Fernández Alvarez, *La Sociedad Española del Renacimiento*. Madrid. 1974. p. 38.
- (28) 拙稿「バルトロメー・デ・ラス・カサス...(3)」(前掲論文) pp.98—105を参照。
- (29) 「新法」については、拙稿「バルトロメー・デ・ラス・カサス ～生涯と作品～ (2)」英知大学論叢『サピエンチア』第10号。昭和51年2月。pp.89—129. 98—105を参照。
- (30) Lesley Byrd Simpson, *The Encomienda in New Spain, the beginning of Spanish Mexico*. Berkeley. 1966. pp.141—142.
- (31) 拙稿「バルトロメー・デ・ラス・カサス...(3)」 pp.140—144.
- (32) Remesal, *op. cit.*, Lib. VIII. Cap. XII. §1. pp.133b—134b. “Digo que la provisión y comisión a V.m. dada sobre el mal tratamiento que dicen haber recebido los frailes de Santo Domingo...fue dada con falsa relación del Obispo y frailes desta provincia. Porque los dichos frailes han dado grandes ocasiones a la inquietud que ha habido en esta ciudad negando los sacramentos a los cristianos..., y entremetiendose en cosas fuera de su Religión, impidiendo la jurisdicción...” 1548年10月18日、カルロス五世はラス・カサスの要請を受けて、チャパ司教区の聖職者の保護を命じる勅令を発布 (*Ibid.*, Lib. VIII. Cap. XIII. §3. pp.138a—139b)
- (33) *Ibid.*, Cap. V. §3. p.113a.
- (34) Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XIX. pp.161—164. (B.A.E. Tomo CX·Doc. XXIX pp. 290—292) この文書には発信の日付と場所が記されていない。
- (35) 請願書では “estos tales procuradores” と記されているだけで、名前は明示されていない。キンターナは、グワテマラの代表はヒル・キンターナであると断定している (Manuel José Quintana, “Fray Bartolomé de Las Casas” *Vidas de Españoles Ilustres*. B.A.E. XIX. 所収 Madrid. 1946. 2^a parte. pp.433—475. 472b—473a.)
- (36) 1489年か1490年、コルドバのボソブランコに生れ、アルカラー大学で論理学などを学んだのち、コレヒオ・デ・サン・アントニオ・デ・シグエンサで神学を修めた。1515年中頃、有名なボローニアのコレヒオ・デ・サン・クレメンテに給費生として留学し、同コレヒオではピエトロ・ポンボナツィに師事し、アリストテレスに親しむ。のち、ローマに滞在し、アリストテレスの翻訳者としてローマ教皇庁に仕え、1526年には自由意志をめぐり、ルターを論駁する論文 *De fato et libero arbitrio* を執筆。ローマ却掠 Sacco di Roma (1527年5月) ののち、ナポリに滞在し、枢機卿カエターノの招きでガエタへ向い、枢機卿より新約聖書の註解を依頼された。ヘンリー八世の離婚問題に際してはアラゴンのカタリーナ側を支持し、又、親友アルベルト・ピオとエラスムスとの論争においてはピオを弁護し、エラスムスと文通 (1532年)。1536年、皇帝カルロス五世のクロニスタとなり、22年間滞在したイタリアを去り、故国へ帰る。イタリア滞在中、数多くのアリストテレスの作品を註解翻訳し、その名声は絶大なものであった。1533年、ボローニアに滞在した折、オスマン・トルコとの戦争の是非を論じる作品『第一のデモクラテス。戦争とキリスト教との両立についての対話』*De convenientia militaris disciplinae cum christiana religione, dialogus que inscribi-*

tur Democrates (西語版: *Tratados políticos de Juan Ginés de Sepúlveda*. Traducción castellana del texto original latino, introducción, notas e índices por Angel Losada. Madrid. 1963. pp.127—233) を著した。戦争とキリスト教の教えが両立することを説き、オスマン・トルコとの戦争を正当化するセプールベダの考えは枢機卿フランシスコ・キニョネスに高く評価され、その結果、1541年、セビーリャでアントニオ・バルバの訳による西語版が公刊された。(この作品に関しては、Henri Mechoulam, *L' Antihumanisme de Juan Ginés de Sepúlveda Etude critique du «Democrates primus»*. Mouton 1974を参照)

セプールベダの伝記については、主に次の二作品を参考にした。

Aubrey F. G. Bell, *Juan Ginés de Sepúlveda*. Oxford. 1925. pp.1—22.

Angel Losada, *Juan Ginés de Sepúlveda. A través de su "Epistolario" y Nuevos Documentos*. Madrid. 1973. pp.11—92.

- (37) Angel Losada, *op. cit.*, pp. 93—94.
- (38) 註 (36) で述べた *Tratados políticos* ... にロサダによる西語訳がある。pp.1—27.
- (39) 1545年 3月3日付 (ブリュッセル) カルロス五世からフェリーベに宛た書簡で言及されている (Manuel Fernández Alvarez, *Corpus documental de Carlos V*. Salamanca. 1975. T. II. Doc. CCCX. p. 350) この点については、Lewis Hanke, *The Spanish Struggle* ... pp. 95—102 を参照。
- (40) Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XXV. pp. 543—568. *Proposiciones temerarias, escandalosas y heréticas que notó el doctor Sepúlveda* ... p. 544.
- (41) A su Majestad El Comendador mayor (Juan de Zúñiga) a XXVII de Septiembre de 1545: "El doctor Sepúlveda... ha compuesto un libro en latín en que muestra cuán justas son las causas de guerra que V.M. manda hazer a los indios y cómo se pueden y deven su biniestar y justo título..." (en Angel Losada, *Juan Ginés de Sepúlveda*... pp. 199—200).
- (42) 本稿ではアンヘル・ロサダによる西語訳 *Democrates Segundo o de las justas causas de la guerra contra los indios*. Madrid. 1951. を底本とする。
- (43) *Democrates* II. pp. 1—2.
- (44) *Ibid.* p. 11.
- (45) *Loc. cit.*
- (46) *Democrates* I. p. 153 "... cuando decimos que una cosa es buena o mala, justa o injusta..., queremos que se entienda «según el juicio de los buenos y virtuosos»..."
- (47) John H. Parry, *The Spanish theory of empire in the sixteenth century*. Cambridge. 1940. p. 34. セプールベダの自然法理論については、Manuel García—Pelayo, "Juan Ginés de Sepúlveda y los problemas jurídicos de la Conquista de América" *Tratado sobre las justas causas de la guerra contra los indios*. México. 1941. 所収 p. 1—42. 7—14. を参照。
- (48) *Democrates* II. pp. 12—19.
- (49) *Ibid.*, pp. 19—23.
- (50) *Ibid.*, p. 27.
- (51) *Ibid.*, p. 15.
- (52) *Ibid.*, p. 22.

- (53) Teodoro Andrés Marcos, *Los imperialismos de Juan Ginés de Sepúlveda en su Democrates Alter*. Madrid. 1947. p. 220.
- (54) アリストテレス『政治学』山本光雄訳 岩波文庫。昭和42年。第1巻 第5章 1255a. p. 43.
- (55) Silvio Zavala, *La filosofía política en la Conquista de América*. México. 1972. p. 56.
セプールベダの先天的奴隷人説の解釈については、同じ著者の *Servidumbre natural y Libertad cristiana según los tratadistas españoles de los siglos XVI y XVII*. México. 1975が詳しい (pp. 41—56)
- (56) *Democrates II*. pp. 38—43.
- (57) *Ibid.*, p. 44.
- (58) *Ibid.*, p. 45.
- (59) *Ibid.*, p. 46.
- (60) Venancio D. Carro, O.P., *La teología y los teólogos-juristas españoles ante la Conquista de América*. Salamanca. 1951. p. 604.
- (61) Ramón Hernández, O.P., “Las Casas y Sepúlveda frente a frente” *Ciencia Tomista* CII. 2—3. abril-septiembre. Salamanca. 1975. pp. 209—247. 222.
- (62) *Democrates II*. p. 59: “No pueden los paganos, por el solo hecho de su infidelidad, ser castigados ni obligados a recibir la fe de Cristo contra su voluntad...; sin embargo, lo que sí se puede es apartarles de los crímenes.”
- (63) ロサーダによれば、セプールベダはメキシコの征服についてエルナン・コルテスから直接に情報を得たらしい。又、ロサーダは『第二のデモクラテス』の執筆を勧めた友人のひとりとしてコルテスを挙げている (Angel Losada, *Juan Ginés de Sepúlveda* ... p. 196. pp. 233—266)。
- (64) *Democrates II*. p. 62.
- (65) ビトリアの理論に関しては、伊藤不二男著 『ビトリアの国際法理論』 有斐閣。1965。を参照。
- (66) *Democrates II*. pp. 64—65.
- (67) *Ibid.*, p. 66.
- (68) John L. Phelan, *El Reino Milenario de los Franciscanos en el Nuevo Mundo*. México. 1972. p. 19.
- (69) 「ある人が盛大な晩さんの席をもうけてたくさんの人を招いた。 晩さんの時刻になったので、招待した人々のところへしもべを送り、“準備ができましたからおいで下さい”といわせると、みなそろって断わってきた... しもべが帰ってこのよしを主人に告げると、主人は怒って、“すぐ町の大路小路に行って、貧乏人やかたわや、めくら、足なえなどをここへ連れて来なさい”としもべに言いつけた。しもべが、“ご主人様、おおせのとおりしましたが、まだ席が余っています”と言うと、主人は“道ばた、垣根にそって行き、人々をむりやり連れて来て家に一杯にしない...”と答えた」。(バルバロ訳、ドン・ボスコ社 1973年。)
- (70) *Democrates II*. pp. 70—71.
- (71) *Ibid.*, p. 66.
- (72) *Ibid.*, pp. 66—67.
- (73) *Ibid.*, pp. 67—76.
- (74) *Ibid.*, pp. 28—29.

- (75) セプールベダはさらに征服を正当化する根拠として征服がもたらした善に言及しているが、この点については、Lewis Hanke, *Aristotle and the American Indians. A Study in Race Prejudice in the Modern World*. Indiana. 1959. pp.52—53 (邦訳『アリストテレスとアメリカ・インディアン』佐々木昭夫訳 岩波新書 1974年 pp.81—82.)を参照。
- (76) *Democrates* II. p.29.
- (77) *Ibid.*, p.30, 117.
- (78) *Ibid.*, p.119.
- (79) herilis (erilis) とは主人、家長を意味する erus の形容詞形。セプールベダは “imperium herile” という言葉を主人の命令への従属という意味で用いており、それは人間としての法的人格、経済的人格、家族としての権利及びあらゆる市民権の剝奪を意味していない。すなわち、本来の意味での隷属ではない。すぐあとで、彼は次のように明言している：“...y a esos bárbaros como a criados, pero de condición libre, con cierto imperio templado, mezcla de heril y paternal, y tratarlos según su condición y las exigencias de las circunstancias.” (p.120).
- (80) *Ibid.*, p.123.
- (81) T. Andrés Marcos, *op. cit.*, pp.185—186.
- (82) Lewis Hanke, *Aristotle and the American Indians* ...pp.71—72. (邦訳 p.111).
- (83) Ramón—Jesús Queralto Moreno, *El Pensamiento Filosófico—Político de Bartolomé de Las Casas*. Sevilla. 1976. pp.90—91.
- (84) Las Casas, B. de, *Aquí se contiene una disputa o controversia* ... B.A.E. CX 所収 Madrid. 1958. pp.293—348. 293—294a.
- (85) Fabié, *op. cit.*, II. Apéndice XXV. *Proposiciones temerarias* ... pp.544—545.
- (86) 註(41)を参照。“yra con ésta un traslado de la sustancia del en castellano para que V.M. lo pueda ver, lo que puedo dezir a V.M. es que, según han dicho, haviéndolo visto el Presidente y los del Consejo Real de V.M. y otros buenos Letrados les ha parescido muy bien y a algunos del Consejo de las Yndias les paresce que no sería bien imprimirse...”
- (87) T. Andrés Marcos, *op. cit.*, p.53.
- (88) Las Casas, B. de, *op. cit.*, p.294a. ラス・カサスによれば、セプールベダはトリエントの公会議に『第二のデモクラテス』を送付し、自己の理論の正しさを承認して貰おうとした。(Apo-logia Traducción castellana de los textos originales latinos, introducción, notas e índices por Angel Losada. Madrid. 1975. Cap. LVII. pp.376—377).
- (89) T. Andrés Marcos, *op. cit.*, Apéndice II.
- (90) 1548年6月20日付フェリーベの書簡：“...nos a sido fecha relación que el (Sepúlveda) a estado ocupado en la Universidad de Alcalá probando que se examine e despache el libro que compuso de la justificación de la Conquista de Indias los meses de Março y Abril y Mayo deste presente año...”(en Angel Losada, *Juan Ginés de Sepúlveda*...p.200).
- (91) T. Andrés Marcos, *op. cit.*, pp.37—44. 両大学において、審議員が全員、出版禁止に賛同したわけではない。
- (92) アルカラ大学での決定：“La doctrina de este libro prueba cuidadosamente lo que se propone;pero como no es bastante segura, no está bien que el libro se imprima o se

- divulgue” (Cit. por T. Andrés Marcos, *op. cit.*, pp. 38—39.)
- (93) 1548年8月1日付でマルティン・デ・オリバはセプールベダに、コルドバのドミニコ会管区会議で議論されたことを報告している (Angel Losada, *Epistolario de Juan Ginés de Sepúlveda*. Madrid. 1966. Carta 40 [68] pp.148—150.)
- (94) 1548年11月1日、セプールベダは上記マルティン・デ・オリバの書簡に答えて次のように記している：“Las Universidades de buena fe confiaron la decisión del conflicto a un selecto grupo de personalidades entre las cuales *mi adversario* llevó previamente a cabo una labor de captación y de zapa contra mí..”〔イタリック部分は筆者による〕 (Angel Losada, *Ibid.*, Carta 41 [69] pp.151—154. 151—152.)
- (95) Diego de Encinas, *Cedulario Indiano*. Madrid. 1945. Tomo I. fol.231.
- (96) “...todas las cosas que se han hecho en todas estas Indias...ha sido contra todo derecho natural y derecho de las gentes, y también contra derecho divino; y por tanto, es todo injusto, inicuo, tiránico..., y, por consiguiente, nullo, inválido y sin algún valor y momento de derecho.” (*Tratados de Bartolomé de Las Casas*. México. 1965. II. p.873.)
- (97) Manuel María Martínez, *Fray Bartolomé de Las Casas, “Padre de América” Estudio biográfico-crítico*. Madrid. 1958. p.308.
- (98) マリアンヌ・マンローもトゥデラ (B.A.E.CX) も論文の執筆時期を1547年としているが、実証性に欠ける (Marianne Mahn-Lot, *Barthelemy de Las Casas, L'Évangile et La Force*. Paris. 1977. p. 56). 1548年11月 - 1549年4月の間に認められたとするガルシーア・ガリヨの説の方が信憑性に富む。(Alfonso García Gallo, *Las Casas, Jurista* Sesión de Apertura del Curso Académico 1974—75. Instituto de España. pp.53—77. 57.)